國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

常陸大掾氏と中世後期の東国

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中根, 正人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001789

博士論文「常陸大掾氏と中世後期の東国」要旨

中根　正人

一、本論文の意義と課題

本論文の目的は、南北朝～戦国・織豊期における東国、特に常陸国における政治情勢について、中世を通じて常陸において活動していた常陸大掾氏（以下、大掾氏とする。）およびその周辺の勢力を題材として検討し、当該期の実態とその背景を考えていくことである。この目的を達成するため、大きく三部構成とし、常陸の政治情勢について検討を行った。

二、各章の内容

序章「中世後期常陸諸氏研究の現状と本書の構成」では、南北朝～戦国・織豊期における常陸国および大掾氏一族に関する研究史を概観するとともに、本論文の構成を説明している。当該期の常陸地域に関する研究は、佐竹氏に関する研究が進む一方、他の勢力については史料的制約の大きさもあって低調であることを確認するとともに、これらの勢力の研究を進め、佐竹氏や他地域の研究との切り結びをすることが必要であることを述べるとともに、その一端を担うべく、本論文では大掾氏とその周辺勢力の政治的活動について検討することを通じ、当該期の関東や常陸地域の実態と背景を考えるとともに、常陸国の立ち位置を考察することとした。

第一部「十四～十五世紀の常陸大掾氏」では、南北朝期から室町中期頃までの常陸国の政治情勢を、大掾氏の動向に焦点を当てて検討した四本の論文と一本の補論から構成している。

第一章「中世前期常陸大掾氏の系図と代替わり」（初出二〇一四）では、鎌倉～南北朝期の大掾氏について、鎌倉後期の史料である「大掾経幹申状案」（金沢文庫文書）を軸に据えて、その系譜関係の復元を行い、近世成立の系譜にみえる直系の継承の記述とは異なり、鎌倉後期に経幹と時幹の兄弟間で家督を巡る争いがあったことを確認した。更に、相論を経て当主となった時幹の生年の推定から、南北朝初期に活動がみえる浄永との関係が、年齢的に祖父と孫という系図上で確認できる構図とは考え難いことを指摘すると共に、推定ではあるが、実際には時幹と浄永は親子であること、系図でのみ確認できる時幹の子盛幹が、浄永の兄であり、彼が亡くなったことで、浄永が家督を継いだと述べた。

第二章「大掾浄永発給文書に関する一考察―観応の擾乱期の常陸―」（初出二〇一四）では、南北朝期の大掾浄永の青柳庄での合戦に関する発給文書（彰考館文庫所蔵石川氏文書）を軸に据えて、その年次比定の再検討を行った。これまで、系図類を根拠として、興国元年（北朝暦応三年、一三四〇）の南朝方の大掾氏と北朝方の佐竹氏の間で勃発した合戦という構図で語られてきた青柳庄合戦について、受給者の大掾詮国（浄永の子）の活動時期や、当該期に勃発した大掾氏一族石川氏の内紛に係る史料から、この合戦が、実際には貞和末年～観応元年の時期に、石川氏の内紛の中で、一方が佐竹氏と、一方が大掾氏と結んだことで、共に北朝方にあった大掾・佐竹氏が激突した戦いであったことを指摘した。またその上で、この戦いが観応の擾乱が激化した時期とほぼ同時期のものであり、その余波を受ける形で、大掾氏のこれ以降の活動にも影響があったことを述べた。

第三章「南北朝～室町前期の常陸大掾氏」(初出二〇一五)では、前二章を踏まえつつ、南北朝～室町前期の大掾氏の活動とその背景を検討した。これまでの研究において、大掾氏は足利氏満期から徐々に衰退し、永享元年(一四二九)に大掾満幹が足利持氏に殺害されたことで完全に没落したとされてきた。このこと自体は事実ではあるが、その背景には、鎌倉府の政策方針の変化や周辺勢力との関係といった社会情勢の変化が外的要因と、大掾氏家中においては、当主浄永、詮国父子の相次ぐ死と後継ぎの満幹が幼少で家督を継いだこと、満幹自身も前述の通り志半ばで持氏に殺害されたという内的要因とが合わさった結果、没落に至ったことを述べた。その上で、その没落は直線的に進んでいったものではなく、苦しい状況の中で、浄永・詮国・満幹は、鎌倉府や幕府、犬懸上杉禅秀への働きかけや、常陸平氏としての庶子家の統率を通じた在地支配の強化を図ることで、常陸南部の常陸平氏勢力圏に持ち続けてきた影響力の維持と拡大を図っており、それは一定の成果を挙げていたことを指摘した。

第四章「室町中期の常陸大掾氏」(初出二〇一三)では、これまでほとんど言及されてこなかった永享年間頃から享徳の乱期にかけての大掾氏の活動の見直しを図った。大掾満幹殺害事件後、佐竹氏を介した統治を経て、大掾氏一族の頼幹・清幹が相続する形で大掾氏は存続し、なおも常陸国内に一定の勢力を有していた存在であったと述べた。そして享徳の乱に際しては、ほぼ一貫して幕府・上杉方の勢力として活動し、佐竹氏や小山氏などと共に、幕府から期待される存在とみられることから、当時の大掾氏の勢力は、同じ常陸国内の佐竹氏や小田氏に匹敵するものであり、他国からも認められるものであったことを指摘した。

補論一「「平憲国」再考」では、第四章の旧稿発表段階で大掾氏当主と考えていた「平憲国」について、史料の見直しを行った。憲国は佐竹義憲の子で、大掾氏の家督を継いだ人物であり、史料についても彼の当主段階で発給したものであると旧稿段階では考えていたが、見直しの結果、何れの史料も応永年間の史料であることを明らかにした。その上で、書札礼や佐竹義憲の活動時期などから、「平憲国」は大掾氏の当主ではなく、応永年間に大掾満幹の下で活動した重臣級の人物であったと論を改めた。

第二部「十六世紀の常陸大掾氏とその周辺」では、室町後期から織豊期までの常陸国について、主に大掾氏の動向に主眼を置きつつも、時期によっては史料的制約などから、同じく常陸南部に勢力を持っていた小田氏、或いは鹿島・行方郡地域に蟠踞していた「南方三十三館」を中心に据え、当該期の政治動向を検討した論文四本と補論二本から構成している。

第一章「戦国初期の常陸南部―小田氏の動向を中心として―」では、十六世紀前半の常陸地域について、小田城の小田政治の活動に焦点を当てて検討した。永正年間に始まる古河公方家の内紛の中で、政治は周辺勢力の動静に影響を受けつつ立場を転々とさせながら、勢力維持と拡大を図ってきた。享禄年間頃になると、公方家の内紛の影響が薄れ、大掾氏や江戸氏など周辺勢力との利害に基づき合戦と和睦を繰り返す一方で、佐竹氏や宇都宮氏と結び、下野の那須氏や下総結城氏とも争う関係に在ったことを述べた。そして、このような関係性の上で、天文年間の政治は、宇都宮氏の支援のために下野まで出陣して那須氏や下総結城氏と争い、常陸国内では行方郡や小川城など東部への進出を図りつつ大掾氏を牽制したものの、東部へ

の進出は失敗に終わったことを指摘した。

補論二「戦国初期の大掾氏―大掾忠幹の発給文書から―」では、戦国初期の大掾氏当主忠幹の出した起請文と書状（共に真壁文書）の年次比定について再検討を行うとともに、当該期の大掾・小田・江戸氏の関係を見直した。この二通が、それまで友好関係にあった大掾―江戸氏間の不和を受け、享禄元年（一五二八）に結ばれた大掾―小田氏間の和睦に関する史料であることを指摘するとともに、この頃までに、古河公方家の対立の影響が薄れ、大掾・小田・江戸氏は対立と融和を繰り返しながら、自らの勢力の拡大を図り、周辺勢力もそれに関わりながら自らの所領の確保を図っていたと述べた。

第二章「戦国期常陸大掾氏の位置づけ」（初出二〇一三）では、戦国期後半の大掾氏について、その政治的動向と立ち位置について検討した。従来の研究において、佐竹氏に従属する立場にあったとされてきた当該期の大掾氏について、そのような理解は、常陸が佐竹氏に統一されたという認識によって生まれたものとみられること、後北条氏や伊達氏など、佐竹氏と距離を取っていた側の史料や近世に佐竹氏を主役として作られた二次史料、軍記物の影響が大きい可能性を指摘した。その上で、当該期の大掾氏が佐竹氏と対等の立場にあり、佐竹「洞」とは一線を画した立場で同盟関係を結び、その関係性の上で佐竹氏と協力していたと述べた上で、大掾氏は佐竹氏と共に後北条氏と戦う「味方中」の一人であったとした。

第三章「大掾清幹発給文書の検討―花押形の変遷を中心に―」では、最後の当主となった大掾清幹の発給文書について、花押の変遷と内容の検討から彼の活動について考察した。花押形については、十八歳の若さで没した清幹が、十年に満たない活動時期の中で、一～二年程度の間隔で改判を繰り返していたことを指摘した。また史料の残存状況に拠る所はあるが、この頃の大掾氏が行方郡との関係が深く、従来江戸氏や佐竹氏との関係の強さが指摘されてきた同地域への大掾氏の影響力も、無視できないものであったと述べた。

第四章「「南方三十三館」謀殺事件考」（初出二〇一六）では、天正十八年（一五九〇）から翌年にかけて常陸で起こった「南方三十三館」謀殺事件の所伝について、「南方三十三館」諸氏の人物比定を行うと共に、天正末年の常陸情勢の検討を行った。小田原合戦に際し、大掾氏や江戸氏、「南方三十三館」諸氏の多くが、周辺勢力との対立や家臣団の内紛などにより、所領を空けることができず、自領に残り不参であったこと、これが佐竹氏にその後の主導権を握られ、彼らの所領を含む地域を豊臣政権に安堵された。そして、その後ろ盾を獲得した佐竹氏が、これまで直接影響を及ぼせなかった大掾氏や江戸氏領、鹿島・行方郡への進出を図り、その過程で江戸氏は没落、大掾氏は滅亡し、「南方三十三館」諸氏も、多くが佐竹氏に招かれ、領内各地で分散して殺害され、鹿島・行方郡の所領を奪われることで、その支配基盤を破壊されることとなったが、その一方で、彼らの血筋は根絶されず、郡内各地で受け継がれたことで、古文書・記録類の継承がなされ、また先祖の活躍を伝える所伝の生成がなされたことを指摘した。

補論三「嶋清興書状にみる天正十八年の大掾氏と豊臣政権」では、「南方三十三館」に先んじて佐竹氏に滅ぼされた大掾氏について、新出の小貫頼久宛嶋清興書状（個人蔵）から天正十八年当時の動きを再検討した。大掾氏が豊臣政権と直接交渉をしていたことが、この書状の発

見により明らかとなったこと、一方で人質拠出を巡って逡巡し、結果として拠出しなかったとみられること、その結果佐竹氏に常陸国内の安堵がなされ、大掾氏攻めと同氏の滅亡に繋がったことを指摘した。

第三部「中世後期の常陸の諸勢力」では、大掾氏と同じく常陸地域活躍した勢力の内、室町期関東における戦乱の舞台となった小栗城の小栗氏、戦国初期の古河公方家の内紛の中で独自の行動を取っていた公方御連枝の足利基頼、そしてその古河公方家や周辺勢力との関係を築きながら勢力の維持を図っていた真壁城の真壁氏にそれぞれ焦点を当て、室町から戦国期の常陸情勢の見直し、そして当該期の常陸国がどのような立ち位置にあったのかについて考察した論文三本から構成している。

第一章「室町期の常陸小栗氏」では、小栗御厨を拠点とした常陸小栗氏の動向と背景を考察した。幕府と鎌倉府の対立の中、幕府御料所中郡庄の存在などから幕府の影響を受けた小栗氏が、鎌倉府勢力の進出に対抗するために幕府と結んで戦ったこと、小栗没落後も、幕府からは対鎌倉府要員の一人と目され、その後の活躍で旧領回復を果たしたものの、その後の対応から、小栗の所有権は上杉氏に移り、享徳の乱で再び没落することとなったことを指摘した。その上で、所領であった小栗周辺が、東国における陸上・水上交通の要所であったことで、中世東国における戦いの舞台となったことを述べた。

第二章「古河公方御連枝足利基頼の動向」(初出二〇一六)は、十六世紀前半に常陸南部で活躍した、古河公方御連枝足利基頼について、史料の年次比定を通じてその活動を考察した。当該期の常陸において、大掾・真壁・土岐原氏などの諸勢力をまとめ上げつつ、自由な活動を展開していた基頼だが、他の兄弟のような肩書を持たないために、勢力を拡大する基盤を持ち合わせず、また公方組織の中にも立ち位置を持っていなかったことで、古河公方家の代替わりと時を同じくして、小弓公方方に転じたことを述べた。それと共に、当該期の常陸が、公方家の内紛の中で後詰を求められる場所であったがために、基頼が派遣されたこと、常陸の諸勢力の側も、自己の利害の下でそれに対応していたものの、抗争の中心地ではなかったことからその影響力は限定的で徐々に減少し、代わって近隣諸氏間の対立が顕在化していったことを指摘した。

第三章「十六世紀前半の常陸真壁氏」では、前章及び第二部第一章、補論二の検討を踏まえ、小田氏、基頼と密接に関わった当該期の真壁氏を素材とし、その動向を検討した。古河公方家の内紛に始まり、後北条氏の勢力拡大と山内・扇谷両上杉氏との対峙という大きな動きがある中で、真壁治幹、家幹父子は公方家や大掾・小田氏ら近隣の諸勢力と積極的に交流を深めることで、所領の安定と近隣の平和を求めつつ、自らの存在感を高めたことを指摘した。また特に家幹については、文化的な側面での活躍が確認でき、鹿島社・筑波地域の寺社の他、連歌師など幅広い層との交流を見出すことができ、真壁の武家文化の礎を築いた人物といえる。そしてその文化的活動は、武家としての真壁氏にもプラスに働いたことを指摘した。

三、結論

これらの論考で明らかにしたことを基に、終章「中世後期の常陸大掾氏と常陸国」では、まず

当該期の大掾氏について、南北朝～室町前期にかけては、佐竹・小田氏と同等に近い、関東の政治秩序の中においては比較的高い地位に在った勢力とみられること、そのために鎌倉府の圧力を受け、徐々に影響力を削がれたものの、在地に根差して続いてきた家であったことで、完全に滅ぼされずに家として存続したこと、戦国期に入り、「東方之衆」の一員として、佐竹氏と共に戦った大掾氏だが、確かに佐竹氏が衆の中心的存在として、対後北条氏の戦いの中で、一方の旗頭のような存在として対峙していたことは、後北条氏側の史料などからみても間違いないと思われるが、佐竹氏と大掾氏など常陸の諸勢力の関係は、軍事上の一時的なものであり、彼らは「味方中」として関係を構築して戦う関係にあったと指摘した。そして、佐竹氏と彼らの間に明確な上下関係がなく、佐竹氏の力が彼らの所領に対して及ばなかったことが、天正十八年末～十九年の佐竹氏による大掾氏や江戸氏、「南方三十三館」に対する武力行使による打倒の背景であったと考えられると述べた。

また、中世後期の常陸という地域については、南北朝内乱に際し、北朝・南朝双方にとって、東国における要衝となっていたこと、続く室町期には、水陸交通の要衝であった小栗城などを舞台として、たびたび大きな争いが繰り広げられたことが確認できる。一方で、享徳の乱後の古河公方家や上杉氏を中心とする関東の戦乱に際しては、その中心地からは外れ、後背の地となり、公方家の内紛などの影響は徐々に薄れていく中で、特に常陸中南部においては、大掾・小田・江戸の三氏が軸となり、対立と融和を繰り返していくようになり、また周辺の勢力もそれに関わる形で関係を築いていったのであった。また、このような常陸の位置は、完全に関東の戦乱から外れたわけではなく、戦乱の当事者たちからは、後詰を期待される地域であったといえる。

そして戦国後半になると、佐竹氏が「東方之衆」の盟主的な存在として勢力を拡大した。その背景としては、東関東の有力家の当主の活動状況から、当該期の東関東における諸氏の中心に立つだけの家格と勢力を兼ね備えていたのが佐竹義重だけであったことと共に、その居城太田城が、対後北条氏の最前線である西や南からの進出を受けにくい環境にあったことで、本拠への外的からの影響を大きく受けず、安定した支配体制を築きつつ、「東方之衆」の中心として立つことができた理由の一つとして考えられることを指摘した。また常陸という立地においては、四方を水に囲まれた南東部の鹿島・行方郡についても、その地理的環境により、外部の勢力が攻め入ることが難しい地域であったことから、数村規模の小領主が、天正末年まで、ほぼ独立した形で多数存在し続けられたのではないかと指摘した。

最後に、今後の展望として、城郭や遺跡の発掘調査や、その成果を踏まえた都市論の視点からの豊富な研究成果との接続や、常陸総社宮、鹿島神宮、吉田神社、吉田薬王院など常陸における寺社勢力との関係に係る検討が必要であること、研究環境の整備として、近世写本を中心とする未翻刻史料の収集や分析も進めるべきであることを述べた。